

「シベリア抑留」における日本人捕虜たちの音楽活動

森谷 理紗

(日本学術振興会特別研究員RPD(大東文化大学))

第二次世界大戦後、満州、千島列島、朝鮮半島にいた60万人以上の日本人兵たちが、ソ連軍によってシベリア各地の収容所(ラーゲリ)に移送され、その後数年間にわたって労働に従事することとなった「シベリア抑留」の問題は、戦後長らく目を向けられてこなかった。体験者の手記は2000点を超える一方、専門家による調査・研究は90年代まではロシア側の文書が非公開だったことも起因して、未だ十分ではない。

だが、文化的側面に目を向けると、一つには異文化接触の場、もう一つには多様な創造活動の場としての興味深い側面が垣間見える。現地のロシア人の合唱文化に触れ、多くの歌を戦後の日本にもたらしたことは戦後の日本音楽史の脈絡からも重要なトピックである。そして、文化創造活動の面では、詩・絵画・歌など精神の安定を求めて行われた個人的なレベルから、次第に趣味のサークルが形成され、集団レベルでの活動がさまざまな規模で活発に行われた稀な事例であると言える。中でも楽団は、芸術を政策に用いていたソ連の思惑とも合致したことから、「民主運動」の手段の一つとしての機能を果たす目的で推奨されていった。各地で開かれた演芸会では、日本の歌、ロシア・ソヴィエトの歌、創作演劇などが披露された。また、日本人向けにハバロフスクで作成・発行された「日本新聞」の紙面上では、新しい詩や曲がしばしば募集されて多くの歌や劇が生まれた他、シベリア各地の収容所から選抜された楽団を競わせる文化コンクールも行われた。

このほか、戦前から日本で活動していた音楽家たちは、時に当時のソ連の音楽界の動向をリアルタイムで知る機会をも得、帰還後ロシア・ソヴィエト音楽の専門家として活動していくことになった。

本発表ではこうした日本人たちの「シベリア抑留」における文化創造活動について、音楽を中心に、日露両国における調査の成果を踏まえて紹介する。